かさおか

発行所
天理教笠岡大教会
かさおか編集掛
笠岡市用之江377
郵便番号714-0066
(0865)
電話 66−1311
FAX 66−1314

弥高山分教会

(2月4日 撮影)

立教179年
2月号

大教会長様おはなし

つとめとさづけに拘って 日々、コツコツと

1・20年頭会議において

立教179年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会神殿で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。先ず1月4日、本部会議所における真柱様の年頭あいさつを拝聴。引き続き、大教会長様は、「教祖年祭の年」としての歩み方について懇切に話された。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの要旨は次の通り。

立教179年、明けましておめでとうございます。

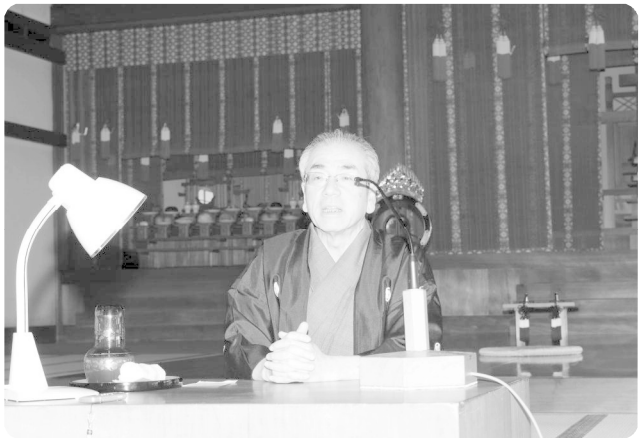
昨年一年は、年祭活動仕上げの年として、精一杯つとめられ、誠にご苦労さまでした。

仕上げの年に当たっては、心定め完遂、また、それを目指して、一人でも多くの人をおぢばに誘っておぢばを賑やかにしようということを、お互いに申して、共々に、成人の歩みを進めた一年でした。

お陰で、10月25日、眞明組合同での別席・ひのきしん団参には、笠岡から1300人を越える大勢の方々がおぢばに帰られ、共にひのきしんの汗を流して、本当に素晴らしい団参となり、共々に、喜びを分かち合えました。

●本年を「年祭の年」と位置付けて、修理・肥に励もう

いよいよ教祖130年祭が目前です。お互いに誘い合わせて、一人でも多くの方がおぢばに帰られ、教祖にお喜びいただける年祭にしたいと思います。



「年祭の年」の歩み方を話される大教会長様

ご本部から「26日は大寒波が予想されるので、交通の便には、十分に気を付けてお帰りください」という通知がありました。今年一年、年祭の年ですので、26日に帰れなくても、暖かくなってから日を改めておぢばに帰って、教祖に直々お目通りするということでも結構ですので、ご身上やお年で無理だと思われましたら、くれぐれも無理なさらないようにお願いいたします。

さて、真柱様は、新年のご挨拶で、教祖130年祭を目指して共々に成人の歩みを進めたが、年祭は終着点ではなく、新たな歩み出しの旬である。教祖年祭は、成人の歩みをするための節目であって、終着点ではない。年祭に向かって努力したことは、必ず、年祭後に芽生えてくると述べられました。

年祭が済んだら終わりではなく、年祭が終わってからは、新たなスタート、次の塚・140年祭に向かう歩み出しの年であるということを、しっかり心に置いていただきたい。

また、「蒔いたる種は皆生える」ではありますが、蒔いた後、しっかりと修理や肥をすることによって、より確かな御守護に繋がると考えれば、むしろ、年祭が済んだ後、しっかりと修理・肥をしていくことが大切だと思いますので、本年一年を「年祭の年」と位置付けて、より一層、教祖にお喜びいただき、よりお働きいただける一年の歩みにしたいと思います。

●つとめとさづけに拘（こだわ）る

明治20年、私たちの成人の歩みを進めてほしいという思いの上から、教祖が25年先の定命を縮めてまで急き込まれたのが、つとめとさづけでした。

そういう上から、「教祖の年祭の年」として歩むために、大教会としては、今年一年の歩みの指針として、つとめとさづけということに拘ってつとめきりたいと思います。

何故、つとめとさづけを急き込まれたのかということを簡単に申せば、ひながたを通りやすくするためということです。

ひながたの道を通らねばひながた要らん。（明22・11・7）

とは仰せられますが、浅はかな考えでいけば、教祖は、人間創造に当たっての母親のいんねん・魂の持ち主だから通りやすいとか、親神様が入り込まれ

て働かれるので、人だすけも出来たと考えられます。

簡単に言えば、教祖だから通れるのであって、私たち普通の人間は、実際にひながたを辿ろうと思っても、教祖と同じようには通れないと考えがちです。

そこで、ひながたをひながた通り、辿りやすいようにと、25年先の定命を縮めてまで急き込まれたのがつとめとさづけだということになります。

詳しいことは、明日、お話ししますが、どうぞ、今年一年、その点を心に置いて、成人の道を歩みたいと思います。

●教会毎に、三年千日活動の活用を

具体的な打ち出し云々はしませんが、三年千日、折角、「成人目標」を掲げてつとめましたので、その点も心に置いて、それをそのまま通りということではなく、今度は、それを参考にしながら、それぞれの教会が、教会ごとに、今年一年の成人の歩みを進めていくということもよいでしょう。

特に「おたすけ・お願いカード」は、そのまま、そういうものを活用しながら、成人の道を歩んだらよいと思います。一人でも多くの人に、人をたすける心を遣ってもらうことが大切だ思います。

ただし、今までのように、全て大教会に集めて御供えするということは、明日で終了になりますので、それぞれの教会で御供えして、そのカードは教会で責任を持って処分してください。

●日々、コツコツと積み重ねよう

ところで、私が激痩せしたので、身体が悪いのではないかと心配される方がありますが、私は、一昨年の暮れに、ちょっと大きな怪我をし、手術しなければならない状況になって調べてもらうと、血糖値と血圧が高く、これを下げないとより大きな身上になる、そのためには、薬を飲みながら、体重を65kgぐらいまで落とした方がよいと言われました。

一昨年の段階で80kgを越えていて、65kgまで落とすのは大変だと思いましたが、食事のコントロールと運動を毎日して、自分なりに努力して、どうにか、65kgまで落としました。

自分では努力したつもりですが、余りに順調に体重が落ちましたから、心配になって、昨年12月に、内科医の友達に診てもらうと「前は大変な身体だったが、今回は、どこも悪くない。安心だ。」と言われました。

昨夏から薬は一切飲んでいませんし、医者から何も問題ないとお墨付きをいただいたので、どうぞ、ご安心ください。

多くの方からダイエット方法を聞かれ、私がやった食事のコントロールの仕方・運動の仕方を申しました。

そんなことなら出来ると続けている方もおられ、中には、「簡単だけど続けることが無理だ」と話しを聞くだけで終わった方もおられます。実際、大したことはやっていません。ただ続けただけです。

そのことから、日々の信仰の姿も実はそこにあるのではなかろうかと学びました。

たまに立派なことをするのも大事かも知れませんが、むしろ、日々の中で、たすけ心をわずかでも遣って、ほんのわずかなことでもいいから、今できるにをいがけ・おたすけ、たすけ心の発揚、日々に出来るおたすけ活動を、日々、コツコツと続けていった方が、むしろ、いざというときに、大きな御守護を頂戴する理作りになるということを勉強しました。

年祭までは、三年千日と仕切って、何とか何とかという勢いでやったが、年祭が済んで次の年祭・塚に向かう歩みは、むしろ、日々のわずかな積み重ねの方が大事だということを教祖に教えていただいたような気がします。

この一年、共々に、日々、コツコツの積み重ねの中で、つとめとさづけに拘って、つとめきりたいと思いますので、どうぞ、宜しくお願い申し上げます。

《以上要約》

こころの詩

笠岡の教友が選ばれ掲載されていましたので転載いたします。（敬称略）

▼『天理時報』

▽1月17日付「時報歌壇」

・海松ヶ岡㈹　藤井光子さん

雨降りてぬかるんでいる公園で
足取られてるサッカー少年

・芦品㈹　金谷眞佐代さん

真新しい甘露台見て
喜びに心勇みて涙止まらず

▼表紙写真

（吉岡輝昭かさおか編集部員）

春季大祭講話

これから始まる飛躍的なたすけ

大教会長様

立教179年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。

大教会長様は神殿講話で、明治20年の教祖年祭の元一日に思案を起こされ、私たちがつとめとさづけを行なうことが、教祖のお立場を戴いてひながたを辿ることになるとお諭しくだされ、さらに、教祖年祭後こそ、たすけの旬であるとお促しくだされた。要旨は次の通り。

●「命捨てても」の覚悟を偲んで

先ほど、おつとめをつとめる前に、おつとめ奉仕人の方々に、今日は春の大祭なので、明治20年の様子を心に思い浮べ、その時に込められたをやの思いに思いを馳せながらつとめたいと申しました。

明治20年その日は、大変寒い日で、かんろだいは、今のように神殿の中ではなく、つとめ場所の外に据えてありましたので、当然、寒空の下でおつとめし、大勢の方々が、それを取り囲むようにして参拝されたということです。

今、考えれば、神殿の中も、多少寒さはありますが、外に比べれば暖かい中でこうしてつとめられるということは、大変、有難いと同時に、何か、明治20年当時の先輩先生方には、申し訳ないような思いもしながら、つとめました。

当時、おつとめをすれば警察がやってきて、つとめ人のみならず、教祖も拘引されるという状況で、監獄所に入れられれば、強い問い詰めがあって、中には、命を落とす方もおられたので、当時のつとめ人の方々は、命捨ててもという覚悟でつとめられました。

そう考えると、今日、おつとめをつとめるときに、本当に、命捨ててもの覚悟だったかといえば、全く申し訳ない姿です。

関係ないかも知れませんが、当時は、何時、警察が来るか分からないので、おつとめも、警察が来ないうちに、とにかく早く済まそうといって、大変な速さでつとめられた、十二下り全部に1時間掛からなかったとのことです。

速ければいいのでは、決してありませんが、今日、おつとめをしながら、命捨ててもと思ったらもっと速くならないか、同じ思いになればもっとおつとめが速くなったのではないかとさえ思え、より一層、有難さを感じながら、今日は、おつとめをつとめました。

ただ、適当に手を振り、歌を歌い、鳴り物を叩いたらいいのではなく、やはり、その一つひとつに、何でもどうでも、親神様・教祖にお働きいただくという強い思いをもっておつとめをつとめる、改めて、おつとめの大事さ、命捨ててもという思いをしっかりと心に置きながら、これからおつとめをつとめたいと思います。

●教祖だから通れたひながたなのか？

さて、教祖が25年先の定命を縮めてまで、なぜ、つとめとさづけを急き込まれたのかということになりますが、教祖は、天保9年、月日のやしろになられてからは、陽気ぐらしに向かうひながたを御自ら通られました。

当時、お屋敷回りには、その日に食うに困るという方がおられ、次々と金品を施し続けられましたが、ただたすけたい一念の姿でした。

ひながたは何かと一言で言えば、ただ、たすけたいという思い一条の行ないでした。

おさしづに、

ひながたの道を通らねばひながた要らん。（明22・11・7）

と仰せられますが、動もすると、「ひながたは教祖だから通れた」と思ってしまうのではないでしょうか。

私自身も、学生時代は、「教祖は人間創造に当たって母親の魂のいんねんを持ったお方、生まれながらにして、もう、をやの魂を持っておられるので、当然、教祖だから通れる。ましてや、教祖には、親神様が入り込んでおられるので、当然、をびやだすけから始まって不思議なたすけを次々と現わすことができる。私たちが同じようにしてもできるはずがない。」とずっと思っていました。

しかしながら、真似事ながら、一生懸命、にをいがけ・おたすけを積み重ねていくうちに、「そうではなかった。

正しく、有難い親心だ。」と思いました。

確かに、教祖だから通れたのですが、

ひながたの道を通らねばひながた要らん。（明22・11・7）

と仰ったその思いは、一体、どこにあるかと考えると、正しく、25年先の定命を縮めてまで、急き込まれたつとめとさづけにすべてが込められている。つまり、「さあ、ひながた通れよ」と私たちにひながたを通らすために、つとめとさづけを急き込まれたということです。

●「つとめ」の意味

では、なぜ、つとめとさづけがひながたを通ることを意味するのかと考えてみると、おつとめは、人間創造の理を現在に現わすものとしてお教えいただいています。

つまり、おつとめをつとめることによって、人間創造の理・元始まりの理を、正しく、今、ここで、現実のもの、「今」のものとして現わしてくださっているということですから、当然、おつとめし参拝することによって、人間創造の理、正しく、をやの理をそのままいただくということです。

私たちは、おつとめをつとめることによって、教祖の、元々をやの魂のいんねんを持っておられる、その立場そのものをいただくことができるということです。

●「さづけ」の意味

そして、おさづけです。

たんくとよふぼくにてハこのよふを
はしめたをやがみな入こむで　十五・60

と仰っています。

つまり、おさづけを戴き（よふぼくになり）、おさづけをお取り次ぎするということは、教祖（この世を創めたをや）が入り込んでくださるということです。

つまり、教祖に親神様が入り込まれたように、おさづけを取り次ぐとき、二拍手した途端に、教祖が入り込んでくださる。そして、教祖には親神様が入り込んでおられますから、つまり、教祖と一緒に親神様が入り込んでくださる。

手を振り患部を撫でておさづけをお取り次ぎしますが、これは、決して、私がしているのではなく、二拍手した途端、全部、教祖がしてくださっています。

教祖は、おたすけされるときに、やはり、悪いところに息を吹き掛け、撫で摩（さす）られました。

「私」がお手を振って、おさづけで撫で摩るのではなく、二拍手した途端、教祖が入り込んで、正しく、「教祖」が悪いところを撫で摩ってくださいます。これも、教祖の御立場、そのものです。

ひながたを通れといっても通りにくいだろうから、通りやすいようにということで、正しく、教祖の御立場そのものを私たちの立場としてお与えいただいた、それが、つとめとさづけではないでしょうか。

つまり、つとめとさづけをつとめること自体が、ひながたを辿るということです。

●たすけたい一念のひながた

そして、大事なことは、ひながたを辿る、その心は何か。ただ「たすけたい」、その心一つです。

教祖50年のひながたを通して、「たすけたい」、その心を、どう、人々に分からすか、それが、教祖の一つの御苦労の姿であったでしょう。

をびやだすけから始まって、次々と不思議なたすけが現われて、多くの人々が教祖の元に集まりましたが、それは、「たすかりたい」心からでした。

でも、本当の陽気ぐらしの世界に向かうためには、皆の心が「たすかりたい」心から「たすけたい」という心に切り替わらねばなりません。

多くの人が、いろんな信心をしていますが、突き詰めれば、「たすかりたい」から信仰しているので、「たすけたい」といって信仰している人は、まずいません。

逆に言えば、『たすかりたい』という信仰は今までもあったが、それは、違う。『たすかりたい』でもたすけてもらえるが、真の陽気ぐらしの世界に立て替わるためには、皆、一人ひとりが『人をたすけたい』という心に切り替わらねばならない。さあ、その心に切り替えてくれ。その心に切り替えて、ひながた辿りたいと思ったら、さあ、つとめとさづけ。このことによって、正しく、ひながたそのものを辿ることができる。さあ、頼む。」と、御身を隠されたのが、明治20年でした。

●むしろ、明治20年＝教祖年祭から始まる飛躍的なたすけ

明治20年、「おつとめをしたら、御身上である教祖がお元気になられて、また、たすけ一条に歩んでくださる」と思ったところが、おつとめをつとめた後、静かに、教祖が息を引き取られました。

当時の人々は、この世の終わりのように感じられたようですが、飯降伊蔵先生を通しておさしづを伺ったところ、

さあ〳〵ろっくの地にする。皆々揃うたか〳〵。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。扉開いてろっくの地にしようか、扉閉めてろっくの地に。扉開いて、ろっくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあった。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん〳〵に理が渡そう。よう聞いて置け。

（明20・2・18）

というおさしづがありました。

「今までと変わらんように、しっかりとたすけに行く。むしろ、扉開いて、今からたすけするから、何も心配は要らない。それに当たっては、やりたいものもあったが、やれなんだ。これまでは、限られた人にしかやることができなかったが、これからは、『たすけたい』という心さえあれば、願い出る者には誰にでもやろう。」と仰った、この一言です。

それを聞いた当時の人々は、どういう反応をされたのでしょうか。

「今までは、教祖さえ頼れば、教祖がたすけると思っていたが、違う。扉開いてろっくの地になるためには、親神様・教祖を信ずる私たち一人ひとりが、教祖に替わって、しっかりとたすけ一条の上に歩むことによって、親神様が如何様にも自由に働かれてたすけてくださるんだ。よし、教祖の御姿は見えないが、少しでも教祖にお働きいただき、たすけの理がこの世に現われていくためには、さあ、私たちが、教祖に替わってにをいがけ・おたすけしよう。」といって、教祖、御身お隠しの後も、お道の人間が、「さあ、我も、我も」とにをいがけ・おたすけに走り回りました。

一人ひとりが、一生懸命、にをいがけ・おたすけに動き回る中に、次々と不思議な御守護が現われ、正しく、教祖のお働き・親神様の御守護を身近に感じた。「ほんに、なるほど。姿は見えないだけで、教祖がここに居て働いてくださる。有難い。もっと、働こう。」といって、にをいがけ・おたすけに回られました。

それが、今の笠岡の姿・それぞれの教会の姿に繋がってきています。

改めて、しっかりと思案したい。

さあ、教祖130年祭は、もう、後わずかです。年祭を目指してつとめてきたが、年祭が済んだから、もう、これで終わりではありません。

今年の年頭に当たり、真柱様が、年頭に当たっての思いをお聞かせくださいました。「昨年は、おぢばの賑やかな姿を見て、大変、嬉しく思う。年祭に向かってしっかりつとめられて、大変、ご苦労さまでした。年祭に向かって歩んだ成人の歩み、努力したものは、しっかりと、また、これから先に芽生えてくる。つとめてきたその理を活かすためには、やはり、これからの歩みが大切で、三年千日と仕切って歩んできた歩みを、これからの歩みの上に活かして欲しい。」ということを仰いました。

年祭が、また、新たなスタートであると同時に、明治20年の姿を思い起こせば、「御身をお隠しなされたその節こそ、より一層、たすけが現われる旬」であると言えます。

とするなら、年祭が済んだ後こそ、にをいがけ・おたすけしたら、更にたくさんの不思議なご守護が現われて、一人でも多くの人をこの道へとお引き寄せいただく歩みになるのではないでしょうか。

「年祭に向かって、一生懸命、歩んだが、人の御守護はいただけなかった」という方もおられるでしょう。ならば、正しく、年祭が済んだときから、教祖にお働きいただけるということを心に置いて、立派なおたすけ必要ない、日々、出来る、今、出来るにをいがけ・おたすけを常に心に湛えて、わずかずつでもひながたの道を歩むこと、歩みさえすれば、後は、教祖が、自由に働いてくださるということです。

とするなら、年祭が済んだ後こそ、にをいがけ・おたすけに励まねばもったいない。

「さあ、本当のたすけは、これからやで。」と意気込んでくださっている教祖なのに、それに対して、私たちが動かねば、やはり、ダメです。

●種を蒔いたら、しっかり修理・肥を

真柱様は、努力したことは芽生えてくると仰いましたが、放っといたら芽生えるものではありません。蒔いた種がより立派な収穫に繋がればと思うなら、当然、修理や肥が必要です。

とするなら、年祭に向かって理作りしたから何もしなくてよいのではなく、むしろ、年祭が済んだからこそ、修理や肥にしっかりつとめることによって、「さあ、今からたすけてやる。」というをやの思いに応えることができ、不思議・自由の御守護をお見せいただくだけではなく、人を寄せる御守護さえも、教祖はしてくださるということでしょう。

そのことを心に置いて、先ず、教祖130年祭に向かって、一人でも多く、誘い合わせて、おぢばに帰ると同時に、今度、教祖130年祭が済んだら、これから、次の年祭に向かって、日々、勇んで、にをいがけ・おたすけにつとめ励もうということを、今日、この日に、お互いに心に定め、つとめたい。

今年一年、年祭の年として、より教祖にお喜びいただける一年にしたい。どうぞ、共々に勇んでつとめましょう。宜しくお願い申しあげます。

《以上要約》

教祖130年祭執り行われる

1・26　教会本部

1月31日付天理時報で既報の通り、1月26日、教祖130年祭が教会本部で国の内外から約20万人の参拝者の中、執り行われました。

満杯の駐車場

笠岡大教会に繋がる人たちも勇んで参拝し、教祖に深く御礼と感謝を申し上げました。前日の25日は笠岡詰所の駐車場も帰参の大型バス・マイクロバス・乗用車などで満杯となりました。

25日夜には、北棟3階講堂で講師に武輪善浩先生(北大教会部属・信達分教会長)を迎え「おかえり講話」が開かれました。先生は「一ヶ月に千回のおさづけ取り次ぎ」を教祖にお誓いして通られたこと、不思議なおたすけを頂かれたことなど熱意を込めて話され、約200人の参加者を勇ませて下さいました。

「おかえり講話」に勇む

「日本の心」と題して　天理雅楽を披露

12月モスクワにて

弓ヶ濱分教会　森川道弘

昨年12月、21日～24日まで、私は天理大学雅楽部ＯＢ主体で構成された、おやさと雅楽会の一員としてロシアのモスクワへ雅楽の演奏に行って参りました。

成田から飛行機で約10時間。極寒の地と覚悟していましたが、その期間はたまたま暖かく、実際には日本より暖かい、おだやかな気候で過ごす事が出来ました。

今回の演奏は、世界三大音楽院の１つ、モスクワ音楽院からの招待を受けたもので、「日本の心」と題して源氏物語の世界の音楽を披露して欲しいとの事でした。

23日の演奏当日はたくさんの方で客席が埋められ、満席に。演奏の様子はネットを通じて世界中に生中継されました。

管絃から始まり、うた、舞楽と曲が進むにつれてお客様の目の色とテンシ

ョンが変わっていきました。

今回私は青海波という曲の舞人。

この曲は、雅楽の中でも最も豪華絢爛な装束を身に付け舞います。装束には波の模様と108羽の千鳥の刺繍がされています。この波の模様が、青海波模様と言われる模様です。

源氏物語の中では、光源氏と頭中将が華麗に舞う事で有名です。

少し前にあった映画 源氏物語では生田斗真くんがこの曲を舞っています。（ちなみに映画の中では陵王の舞人として私も出演しています。探してみてください！ 余談ですが笑）

最後は曲の中で舞楽の面を贈呈してフィナーレ。

教祖130年祭の直前に、遠くロシアの地で天理雅楽を披露し、たくさんの方に喜んで頂けた事をとても嬉しく思います。

教祖、ありがとうございます。

1月31日付『天理時報』に関連記事が掲載されています。

談話室

あいたかった

福満分教会　福島悦子

今から、二十年余り前に、笠岡詰所で、婦人会委員部長講習会があった時のこと。あまた会員が、寄り合った会場で、私の心は波立っていた。

私は全聾、聴こえぬ者がここにいていいのか、支部長様は、全員出席を促された。「来いと云われたから来たまでよ。」と開き直っても聴こえぬものは聴こえない、どうしようかと焦りのなかで、そばにいた人に、書いて下さいと頼むと、「はい」と受けて下さり、席を並べて掛けた。一心不乱に書く人、字を追うわたし。

難聴失聴者支援要約筆記の条件として、速く正しく読み易く、がある。Kさんはそれを満たして下さった。速く読み易くは私に判る、正しく（話の内容）が判れば、私に難は無い。福山部内のMさんに、書いたものを見せると「これは立派だ、わたしは聞いた端から忘れるのに、欠席した人に、これを廻し読みしてもらうといい。」と絶賛し、褒めたたえた。

以後、Kさんがいれば安心と、会の度に頼むことにした。Kさんお若いので、こどもさんは、と訊くと、「主人がみてくれています、おむつから、哺乳、洗濯まで、なんでもやってくれる、わたしにすぎた主人なのです。」ワッ！旦那さまが!! びっくりぽんや。当時、あさ（テレビ番組）がまだ放送してなかったので、びっくりしやくりした。「育めん」も云われていなかった。今は、父親も育児休暇をとる社会だけど。

私にすぎた主人、と云われる奥さんもご立派だ。ご主人も「すぎたる家内」と云っていられるかもと、想像して、Kさんのご主人の書かれた文章を漁り読みした。なかでも、陽気の連載「陽だまり語録」は、楽しんで読んでいる。

一月号は「あいたかった」。魅力的な意志を持っていられる。

ビエンJKさまに会いたい。お顔も見たことがないのです。かく云う私は、黒髪長く艶やかな美女ならぬ、後期高齢で、聴力障害二級の姿です。やっぱり会わない方が無難です。

平成二八、一、一八

春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます
親神天理王命の御前に　会長上原理一慎んで申し上げます
親神様には　人間の陽気ぐらしを楽しみに紋型ない処よりこの世と人間をお創造め下され十全の御守護でお育て下されたばかりでなく　天保九年十月教祖をやしろとしてこの世の表にお現れになり親心とよろづ一切を明らかにすると共に　陽気ぐらしに向かうひながたの道を御自身からお通り下さいました事は誠に有難く勿体ない極みでございます
私共は身上事情を通してこの道にお引き寄せ頂き　御恩報じを思い念じて日々は朝夕に御礼申し上げつつ「つとめとさづけ」を通してたすけ一条の御用の上に努め励ませて頂いております
その中にもこの月は　教祖が明治二十年　人々の成人を促す上から二十五年先の定命を縮めて御身お隠しになられろくぢに踏み均しに出られた尊い月に当り　二十六日おぢばでは春の大祭(教祖百三十年祭)が執り行われますので当教会でも理のお許しを戴いて本日只今より春の大祭を執り行わせて頂きます　おつとめ奉仕人一同　御身お隠しに込められた親の思いを胸にたすけ心も一入に明るく陽気に勇んで坐りづとめてをどりをつとめさせて頂きます　御前には寒さ厳しき中も厭わず　遠近を問わず寄り集いました道の子供達が九万二千九百六十一枚のおたすけお願いカードに思いを込め相共に声高らかにお歌を唱和し　同じ思いに伏し拝む状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます
さて目前に教祖百三十年祭(春の大祭)が近づいて参りました　一人でも多くの人を誘っておぢばへ帰らせて頂きおぢばをにぎやかにして教祖にお喜び頂く所存でございます　又今年一年を年祭の年として成人の歩みを進めさせて頂きます　明治二十年教祖がお急き込み下さったのが成人の手立てとしてお教え下された「つとめ」と「さづけ」でございますので　「つとめ」は人を揃え手を揃え調子を揃える等おつとめ全てに関わる内容充実を図り　「さづけ」は昨年百四十二名が初席を運んでくれましたので全員のおさづけ拝戴を目指すと共に　よふぼくは一回でも多くおさづけを取り次ぐ所存でございます　更には又御身お隠し後爆発的にお道が伸び現在の礎となった元を思い　年祭後こそと心に誓いにをいがけおたすけにと邁進させて頂く所存でございます
何卒親神様には　年祭を新たなスタートとしてたすけ一条に励む皆の誠真実の心をお受け取り下さいまして　万たすけの上に明治二十年当時の勢いそのままに不思議自由の御守護をお現し下さり　次々と一列兄弟の理に目覚めた真実の人をお引き寄せ下さいまして　世の中から一切の争いがなくなり　万互いに助け合う陽気づくめの世の状に一日も早く立て替わりますよう御守護お導きの程を　一同と共に慎んでお願い申し上げます

おたすけ・お願いカード　　集計：９３，７３５枚
平成２７年１２月２１日～平成２８年１月２１日
累計：１，６２４，６２５枚
平成２５年　１月２１日～平成２８年１月２１日

◆「おたすけ・お願いカード」取り扱いのお願い

「おたすけ・お願いカード」を、上級教会を経由し大教会に集めて御供えすることは、1月21日をもって終了いたしました。

今後は、それぞれの教会で御供えしたカードは、各教会で責任を持ってお焚き上げするなり、シュレッダーに掛けるなりして処分してくださいますようお願いいたします。

教祖祭文

おぢばよりこの笠岡にお鎮まり下さいます
教祖の御前に　会長　上原理一　慎んで申し上げます
教祖には人間元創造（はじまり）の魂のいんねんにより　天保九年月日の社とお定まり下されてより「世界一列救けたい」との親心の真実を理解さす為　御自身（おんみずから）から陽気ぐらしに向うひながたの道をお示し下されたばかりでなく　通りやすいようにと二十五年先の定命を縮めてまで「つとめ」を急き込まれ「おさづけ」を下さいましておたすけの先頭に立って私達をお連れ通り下さいます親心の程は　誠に有難く御礼の申し上げようもございません
私共はこの御高恩に報いたいものと　日夜ひながたを心に湛えて百三十年祭を目標にひながたの万分の一でも辿りたいものと「さあおたすけ」を合言葉に成人の道を歩んで参りましたが　温かき親心のまに〳〵　お連れ通り頂き　よろづたすけの上に次々と不思議自由の御守護を頂戴する事が出来恙無く御年祭の年を迎えさせて頂きました　誠に勿体ない極みでございます
只今はおぢばの理を頂戴し　当教会にても　御教え頂いた通りに手を合わせ　鳴物の調子も高らかに春の大祭を執り行わせて頂き　改めて御前に参出て　よふぼく信者共々にひながたに込められた親心に思いを馳せ　教祖の道具衆としてお使い頂く喜びを心に湛えて陽気ぐらし実現を目指して「つとめとさづけ」で以って　一手一つにたすけ一条に努め切る事をお誓い申し上げます
何卒教祖にはこの心定めをお受け取り下さいまして　新しい芽生えの道をお見せ下さると共に　日一日と成人の道をお連れ通り下さいますよう　一同共に慎んでお願い申し上げます

立教百七十九年　春季大祭　祭典役割表

祭主	大教会長様
扈者	中村邦義
	中村剛

講話	大教会長様

賛者	今川昌彦
	中村道徳
指図方	上原繁道

三月講話	中村道徳

役割／区分	坐り勤	前半	後半
地方	中村邦義	佐藤道孝	吉岡壽
	中村道徳	門脇元教	今川昌彦
	横山逸郎	田林久嗣	淺野明教
おつとめをどり	大教会長様	中村剛	上原繁道
	上原繁道	谷内伸自	中島誠治
	吉岡壽	田中隆之	上原志郎
	大教会奥様	上原順子	岡﨑豊子
	田中ますみ	横山小智榮	室悦子
	門脇郁子	高木孝子	岡﨑和美
笛	高木昭祥	武内清明	佐藤真孝
ちゃんぽん	笹尾正治	吉岡誠一郎	上原浩
拍子木	杉原博之	山野弘実	内海史郎
太鼓	森本忠平	森本忠善	渡邉隆夫
すりがね	三島渉	山田敏教	虫明立生
小鼓	岡﨑真一	赤木素志	上原繁次
琴	虫明好美	武内正美	門脇加津
三味線	佐藤香苗	笹尾一美	三島照美
胡弓	今川佐智子	谷内美知子	吉岡八恵

＜婦　人　会＞

○直轄委員部長研修会並びに全委員部長講習会

日　時　３月２２日（火）１４時３０分 受付、１５時 開講
場　所　笠岡大教会
対　象　委員と直轄委員部長

○(引き続き)全委員部長講習会

日　時　３月２３日（水）９時３０分 開講、１５時３０分 閉講予定
場　所　笠岡大教会
対　象　委員と全委員部長

＜学生担当委員会＞

○学生生徒修養会（大学の部）

期　間　３月３日（木）～９日（水）

○教祖百三十祭春の学生おぢばがえり大会

式　典　立教１７９年３月２８日（月）１０時～　本部中庭
趣　旨　道につながる学生が、教祖１３０年祭に向けて実践してきたおたすけの勢いを持って１万人の仲間とともにおぢばに帰り集う。そして、学生にくださる真柱様のお言葉を心に治め、一人ひとりが信仰の拠点である教会につながり、道の次代を担うようぼくへと成人することを決意する。
スローガン　「次代を担うようぼくへ」
※笠岡大教会として、「**学生おぢばがえりの日**」と定めて下さっております。一人でも多くの学生にお声掛け下さい。

＜雅　楽　部＞

○雅楽勉強会

期　日　３月６日（日）午前９時受付、９時半開講式・講習　～　午後３時半閉講
会　場　笠岡大教会
対　象　初心者・初級者（少年会員、一般）
内　容　初心者は、雅楽の基礎から勉強を、また初級者は平調の越殿楽が合奏できるよう勉強します。
講　師　大教会雅楽奉仕者
参加費　３００円
申し込み　２月２９日までに大教会に申し込み
※楽器は各自持参ですが都合がつかない人はご相談に応じます。

大教会だより

◎教人資格講習会修了者

立教179年２月10日終講

福満　福島　佐和
西伯　本多　孝二
甲井　山田　敏教

＊その他10名程の有志の方がお手伝い下さいました。誠に有難うございました。

◎教祖130年祭詰所受入ひのきしん

照陽　中村　道徳
品治　渡邉　宣子
福岩　水本　実子
髙屋　田中　丈博

訃報

寺下宏一氏

鶴眞分教会長
1月18日出直されました。
享年　84才

よりみち

25日おぢばへ帰参する。その日の朝づとめの後、諭達を拝読。三年千日は、昨年末で終わったけれど、諭達は、教祖百三十祭の前日まで読ませて頂いた。さあ、勇んで出発、心は真っ直ぐ1月26日の教祖百三十祭へ、おぢばへ向かっている。天理行き臨時列車内でおばさんが3人しゃべっている。韓国語だな。天理の本通りでも歩いていると後ろからおばさんの韓国語が聞こえてくる。さすが、教祖百三十祭だな！世界から帰参がある。おやさと書店で特別号を買って店を出ると2時のミュージックサイレンが鳴る。本通りの雑踏が一時静寂になって祈りの時となった。南礼拝場でおつとめ、教祖殿で深く深く御礼を申し上げる。祖霊殿参拝、詰所へ。夕7時から「お帰り講話」を拝聴、教祖のお導きのお話しを訊かせて頂く。翌26日、雨や雪でなく、時折陽射しの続く好天で全く有り難い。いつもの教祖殿内廊下で参拝。中庭は、隅から隅まで参拝で一杯だ！初めて見る光景……。真柱様の祭文、かぐらづとめ、てをどりを参拝。真柱様の御講話に胸が熱くなりました。ああ、教祖百三十祭有難いなあ。（ひ）

昭和52年　（1977年）　立教140年

5・28　大教会准承事・上下分教会二代会長山野新之介出直（八二歳）
6・4　布教所長対象に布教実修会（五日まで）
6・26　昇山分教会設立（初代会長西田順二任命）
鎮座祭：七月二日
奉告祭：七月三日
設立場所：広島県世羅郡甲山町大字西上原九百八番地の四
6・26　白石島分教会設立（初代会長天野繁一任命）
鎮座祭：七月三日
奉告祭：七月四日
設立場所：岡山県笠岡市白石島三百七十五番地
6・26　甕之郷分教会設立（初代会長織田留次郎任命）
鎮座祭：七月七日
奉告祭：七月八日
設立場所：岡山県倉敷市玉島乙島六千八百四十番地の一
6・26　柏島分教会設立（初代会長宮原満寿子任命）
鎮座祭：七月五日
奉告祭：七月六日
設立場所：岡山県倉敷市玉島柏島五千四百二十九番地の二
6・26　上備分教会設立（初代会長田渕義男任命）

昭和52年　（1977年）　立教140年

鎮座祭：七月六日
奉告祭：七月七日
設立場所：広島県世羅郡甲山町大字青近一千五百九番地の六
6・26　安那海分教会恒例祭日変更（毎月六日→十一日）
6・26　高梁川分教会恒例祭日変更（毎月十一日→十五日）
6・26　寄島分教会恒例祭日変更（毎月五日→十三日）
6・26　大辻分教会五代会長井実吉任命（四代会長津田チカヨ辞任）
就任奉告祭：八月二十八日
6・28　大教会准承事・弥高山分教会四代会長平井正雄出直（七二歳）
7・2　布教所長対象に布教実修会（三日まで）
7・26　善実分教会設立（初代会長宇野キクエ任命）
鎮座祭：八月十三日
奉告祭：八月十四日
設立場所：岡山県倉敷市玉島二丁目十三番五号
7・26　玉島分教会恒例祭日変更（毎月十六日→二十日）
7・26　甕港分教会恒例祭日変更（毎月十三日→十七日）
7・26　善備分教会設立（初代会長辻本小治郎任命）
鎮座祭：八月六日
奉告祭：八月七日